第1回 物語文(1)

ことばの学習

漢字の組み立て

漢字には、計（言＋十）や語（言＋吾）や草（艹＋早）のように、左右や上下に分けられるものがあります。このとき、「計」と「語」に共通（きょうつう）する「言」のような部分を「部首」といいます。

○ へん――漢字の左がわにつく。

根	使	池	秋	持	級	話
きへん	にんべん	さんずい	のぎへん	てへん	いとへん	ごんべん

● たとえば「根」の左がわの「木」は、「きへん」といい、漢字の意味が「木」に関係（かんけい）があることをしめしています。「イ」は「にんべん」で「人」に関係があることを、「氵」は「さんずい」で「水」に関係があることをしめしています。

○ つくり――漢字の右がわにつく。

列	助	歌	部	頭	形
りっとう	ちから	あくび	おおざと	おおがい	さんづくり

○ かんむり――漢字の上につく。

花・草	安・家	雲・電	算・答
くさかんむり	うかんむり	あめかんむり	たけかんむり

○ かまえ――漢字をかこむ。

国	区	開
くにがまえ	かくしがまえ	もんがまえ

○ にょう――漢字の左から下をかこむ。

起	近・送	建
そうにょう	しんにょう	えんにょう

○ たれ――漢字の上と左をかこむ。

原	広	病
がんだれ	まだれ	やまいだれ

○ あし――漢字の下につく。

点	先	思
れっか	ひとあし	こころ

(1) 次の部首をもつ漢字をあとからえらび、それぞれ記号で答えなさい。

① ちから　② さんずい　③ まだれ
④ うかんむり　⑤ こざとへん　⑥ くにがまえ

ア 店	イ 図
ウ 院	エ 動
オ 海	カ 守

①	②	③
④	⑤	⑥

(2) 次の①と②の漢字を一つずつ組み合わせて、正しい漢字を四つ作りなさい。（同じ漢字を二度使わないこと。）

① 羽 言 糸 竹　② 氏 白 寺 周

第2回 物語文(2)

ことばの学習

漢字の読み方

○「音読み」と「訓読み」

漢字には「音読み」と「訓読み」があります。漢字が中国から日本に来たときは「音読み」でした。日本のことばにあわせて、あとから漢字に読み方をつけたものが「訓読み」です。

(例) 冬　音読み…トウ　訓読み…ふゆ

柱　音読み…チュウ　訓読み…はしら

漢字の中には、「音読み」だけ、「訓読み」だけの漢字があります。

- 「訓読み」だけの漢字

(例) 貝・畑など、たいへん少ない。

- 「音読み」だけの漢字

(例) 科・地・汽・才・台など、たいへん多い。

○ とくべつなきまりをもつ読みがな

「ぢ」「づ」と「じ」「ず」の使い分け

- 「じ」「ず」はふだん使われます。

(例) 時間・地面・大豆・図画

- 「ぢ」「づ」はとくべつなときに使います。たとえば、二つのことばがいっしょになって一つのことばになったり、同じ音がつづいてあとのことばがにごったりするときに使います。

(例) 鼻＋血→鼻血　三日＋月→三日月

縮む→ちぢむ　続く→つづく

漢字の読みがなはだいたい発音どおりに書きますが、それにあてはまらない、次のような例があります。

「お」と「う」の使いわけ

(例) 王子―おおじ→おうじ　光線―こおせん→こうせん

通る―とおる→とおる　氷―こおり→こおり

次の漢字の読みがなは「え」ではなく、「い」と書きます。

(例) 先生―せんせい　例―れい

(1) 次の漢字の読みを書きなさい。

① 写す　② 写真　③ 投げる

④ 投手　⑤ 決める　⑥ 決意

①	②	③
す		げる

④	⑤	⑥

(2) 次の漢字の読みを書きなさい。

① 目次　② 東京　③ 水泳

①	②	③

第3回 物語文(3)

◇ことばの学習◇

送りがな

漢字を訓読みする場合、漢字を読みやすく、読みまちがえないようにするために、漢字の下にそえるかなのことを「送りがな」といい、つけ方にはおおよそ次のようなきまりがあります。

○ 使い方によって語形がかわるものは、かわるところから送ります。

(例) 走 はしらない / はします / はしる / はしれば / はしろう

読 よまない / よみます / よむ / よめば / よもう

「はしらない」「はします」、「よまない」「よみます」のように、――線のところから送りがなをつけます。

○ 様子を表すことばの中で、最後が「しい」となるものは、「し」から送ります。

(例) 新しい・親しい・美しい

○ 「か」「やか」「らか」のつくことばは、そこから送ります。

(例) 静かだ・軽やかだ・清らかだ

○ 物の名やことがらを表す語には、送りがなをつけません。

(例) 山・月・土・花・天気

○ 読みまちがえやすいものは、読みまちがえないために、形がかわる部分の前から送りがなをつけます。

(例) 生まれる・終わる・動かす

○ 変化する語から転じたもの、また、変化する語に「さ」「み」「げ」などがつき、物の名を表す語に転じたものには、もとの語のきまりにしたがった送りがなをつけます。

(例) 祭る→祭り　願う→願い　冷たい→冷たさ

ただし、次のことばには送りがなをつけません。

(例) 氷・印・帯・話・係・光・組・次　など

(1) 次のことばの送りがなは、アとイのどちらが正しいですか。正しいほうの記号を書きなさい。

① ア 考える　イ 考がえる

② ア 悲い　イ 悲しい

③ ア 苦るしい　イ 苦しい

①	
②	
③	

(2) 次のことばを漢字と送りがなで書きなさい。

① しらべる　② あきらかだ　③ すくない

①	
②	
③	

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

次郎はセミ取りざおをななめにかまえ、庭を横切って、しのび足でニワトリ小屋に近づきました。ニワトリ小屋の入り口の柱に、大きなクマゼミがとまっているのです。

クマゼミというセミを、みなさん知っていますか。セミの中でも一番大きい、ワシワシワシと鳴く、あのセミのことです。そのクマゼミが一匹、柱にとりついて、どう体やしりをふるわせながら、今やワシワシワシと①鳴き立てていました。

金あみにかこまれた、ニワトリ小屋の中で、オンドリが首を立てて、ゆうゆうと歩いていました。メンドリは巣箱の中にすわって、じっとしていましたが、ふっと顔を上げて、低い声でココココと鳴きました。やっとたまごを産みおとしたらしいのです。

オンドリはハッとしたように、メンドリの方を見ました。そしてあわててのどをはって、

「コケッココココ、ケッココ、ケッココココ」

とさわぎ立てました。その声を聞いて、クマゼミはふいに鳴きやみました。

次郎はとたんにはらが立ちました。オンドリのさわぎを聞いて、セミが用心をしたらしいからです。せっかくつかまえようとするのに、用心されては、②取りにがすおそれがある。

次郎はパッと柱のクマゼミにさおを近づけました。とたんにセミは、ジイッと言うような声を残して、すばやくむこうに飛んでゆきました。

「しまった！」

と次郎は思わずさけびました。取りにがしてみると、あのセミは今までにない大きなセミだったような気がして、じだんだをふみながら、③さおで金あみをたたきました。

（梅崎春生『クマゼミとタマゴ』）

問一 ――線①「鳴き立てていました」とありますが、ここからわかるクマゼミの様子としてよいものを次からえらび、記号で答えなさい。

ア 小さい声で鳴いている様子。
イ 低い声で鳴いている様子。
ウ とてもさかんに鳴いている様子。
エ 悲しそうに鳴いている様子。

問二 ――線②「取りにがすおそれがある」とありますが、何を取りにがすおそれがあるのですか。よいものを次からえらび、記号で答えなさい。

ア クマゼミ　**イ** メンドリ
ウ オンドリ　**エ** たまご

問三 ――線③「さおで金あみをたたきました」とありますが、このときの次郎の気持ちとしてよいものを次からえらび、記号で答えなさい。

ア クマゼミがにげてしずかになり、ほっとする気持ち。
イ ニワトリ小屋の中のたまごを早く取りたいという気持ち。
ウ クマゼミをつかまえられなくて、とてもくやしい気持ち。
エ オンドリのりっぱな鳴き声に感心する気持ち。